

平成30年度 月刊 校長通信 10号

(生徒・保護者版) H31.1.28(1月号)



新しい年を迎えました。また、平成も余すところ100日を切りました。年の節目、元号の節目が続きます。竹は、節目から枝を出します。私たちも、節目を意識し、創造の枝を広げていきたいものです。



俊英NOW

●男子ソフトテニス部 選抜でも全国大会へ



1月11日～13日に、石川県小松市で北信越高校選抜ソフトテニス大会が開催されました。県予選を1位で突破して出場した本校男子ソフトテニス部は、各県1位チームによるリーグ戦に2勝2敗と善戦しました。結果、1位リーグ3位ということで、全国選抜への北信越の第三代表をかけて2位リーグ1位の新潟産大付属と対戦し、2-0で勝利し、全国選抜への切符を手に入れました。全国選抜は3月に愛知県で開催されます。

●男子バスケットボール部も頑張っています。



男子バスケットボール部は多くの部員が所属し、県大会常連校として日々練習に励んでいます。更埴地区高校新人大会や北信濃選抜大会で優勝しました。

●バドミントン部も頑張っています。

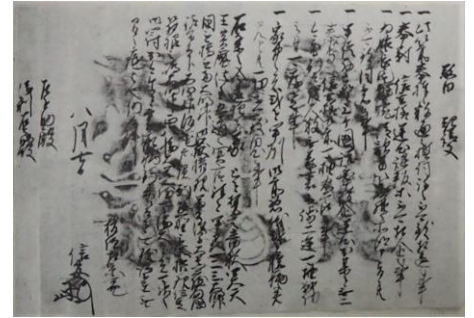
バドミントン部も多くの部員を抱え日々練習に励んでいます。今年度は、公式戦(新人戦)で、創部以来始めて団体戦での県大会への出場を果たしました。長野市長杯大会や須坂新春大会でも優勝することが出来ました。



川中島の戦い (※武田信玄・上杉謙信は時代で名前が変わりますが、以下この名前で統一しています。)

新年を迎え、長男夫婦、長女夫婦と一緒に上田市塩田の生島足島神社へ初詣に行った。10円は、「とおえん(遠縁)」に通じると聞いていたので、お賽銭は20円(二重の縁)にした。さまざまな無理難題を祈願したわりにはあまりに少額であったと反省している。長男夫婦は子授守を買っていた。ご利益があればいいなと思う。皆でお神籤を引いたが、私は小吉だった。まあ、いいか。……というようなことを書きたいわけではない。

生島足島神社は由緒ある神社で文化財の宝庫である。特に武田信玄関係の戦国時代文書が多数保存されていてこれが国の重要文化財になっている。甲斐の武田信玄の侵略に信濃の武士たちは必死に抵抗したが、結局散々な目にあって降伏した。武田信玄は、服属した信濃の武士たちに「起請文」を書かせ、生島足島神社に提出させた。起請文とは、神様に提出する誓約書である。展示館で公開されているので読むことができる。「信玄様には絶対に逆らいません。上杉謙信の甘い誘いがあっても絶対相手にしません。親戚で、もし謀反を企むようなやつがいたらちゃんとたしなめますし、告げ口もします。」というような内容である。文書の末尾に、「もし約束を破ったら悪い病気になります。武運は尽きます。無間地獄に落ちます。」などと書かれている。心ならずも武田に降伏したうえ、こんなえげつない文章まで書かされた信濃武士団の心中はどんなものだったろう。こんな紙切れ一枚に何の効果があるものか、などと現代人の尺度で考えてはいけない。いや、現代人だって冒頭に書いたようにけっこう真剣に祈ったり、縁起を担いだりする。ましてや戦国時代の心性において「神罰」というのは、強烈なりアティーをもって意識されていたのだろう。起請文は、武田にとって十分に有効な「統治の装置」となり得たのである。



こうして武田の勢力圏は信濃を席卷して北上し、ついに越後の上杉謙信の強大な勢力圏に接触した。両ナワバリの境界領域が篠ノ井から川中島の周辺地域で、この地で武田と上杉の軍事衝突が五回発生した。これを総称して「川中島の戦い」という。上杉側にとってみれば国土防衛戦争の傾向が強い。第一次合戦は「布施の戦い」(1553年・天文22年)といい、現在の篠ノ井駅周辺で行われた。篠ノ井駅西口の駅前広場に大きな石碑が建てられている。ちなみに、最大の激戦となったのは、第四次合戦の「八幡原の戦い」(1561年・永禄4年)で、全面衝突となって双方に大きな損害が出た。

信玄が信濃を侵略するに際しての何でもありの所業を思えば、長野県人として武田信玄をそんなにありがたがる義理はないし、川中島の戦いも迷惑な話なのだが、どうも、長野県人は、武田信玄や上杉謙信、そして川中島の戦いが好きなようだ。現に俊英高校校歌の第一番は、「布施の戦い」を念頭に置いて「横田河原に甲越の両雄気負い戦いし、意気を粘

りをこの胸に」と川中島の戦いでの両雄の気概に学べと歌われている。校歌にケチをつける気はないのだが、漫然として無批判に歌詞を受け流してはいけないと思う。両雄の気概の中身を自分なりに検証してみる、そんな批判精神を養ってこそ、校歌は本当に活きるのである。

